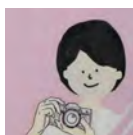




Special E

卒アル制作でAI活用 西条・神拝小で導入 子どもニコニコ！ 先生らくらく！

【ライター】^{とよだ}豊田 さやか

1989年松山市生まれ。2012年入社、社会部、生活文化部。日曜発行の小中学生向け「ジュニアえひめ新聞」を担当中。中学生の頃、取材してくれた愛媛新聞の記者に憧れ、今があります。取材で会おう子どもたちのキラキラした瞳に元気をもらう日々です。2児の母。趣味は育児絵日記を描くこと。

こんなところでも人工知能（AI）が大活躍！ 学校生活の思い出をまとめた卒業アルバムは長年、先生が手作業で写真を選んできた。最も頭を悩ませるのが、子どもの掲載回数をなるべく平等にすること。手間も時間もかかる作業だ。それがAIの顔認証技術を使えば一瞬で写真を選別できてしまう。このシステムを活用した「子ども主体の卒アル作り」が愛媛県で始まっている。

西条市の神拝小学校では本年度初めて、児童が卒アルの写真選びに取り組んだ。2025年12月中旬、その授業を訪ねると、児童も先生もみんなニコニコ楽しそうにタブレット端末をのぞき込んでいた。（豊田さやか）

■ 「めっちゃいい！」

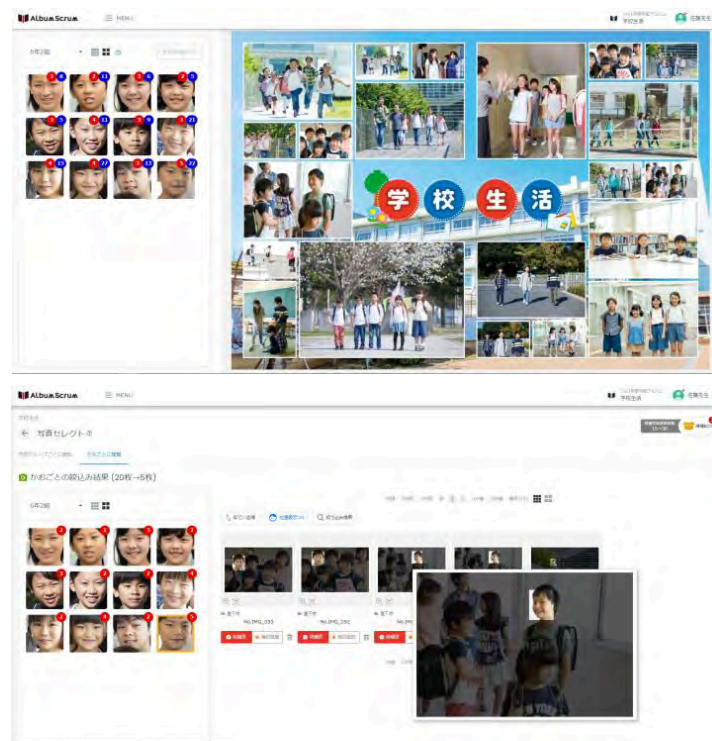


タブレット端末を使い、卒業アルバムに載せる写真を選ぶ西条市神拝小学校の6年生と担任教諭（右）

「めっちゃいい笑顔!」「この写真、大人になって見たら絶対また笑うよね」「真面目に勉強しよる写真も入れよう」。2学期末、6年生の教室では、児童たちが班ごとにタブレット端末を囲み、先生が撮りためた約300枚の写真を見返していた。

卒アルの学級のページに載せる25枚を選んでいるのだ。さまざまな行事や場面から人物の表情だけでなく、一人一人の掲載回数も考えなければならない。肝心なのは「平等」だ。

授業で活用したのが東京のIT企業「エグゼック」が開発したAIで写真を選定するシステム「アルバムスクラム」。顔認証技術で誰が写っているのか判別し、掲載回数をカウントする。指定した人物が写っている写真を瞬時に探し出し、掲載回数の偏りを減らすのに役立つ。



子どもの登場回数をカウントするシステム（エグゼック提供）

「この子が写っている写真が少ないね。入れ替える?」と、児童が掲載回数をチェックし候補を絞っていく。「小さくしか写っていない『私』を見つけられるんだ!」「マスクをしていても顔をちゃんと見分けている」。写真選別の性能には驚きの声が上がっていた。



登場回数を確認しながら写真を選ぶ

渡辺葵さん（12）は「全員の思い出に残るように、みんながバランスよく載っているアルバムにしたい。人の顔をクリックすると、その人が写った写真が一覧表示されて、お薦めが分かりやすいです」。八木心春さん（12）は「卒アルの写真は先生が決めると思っていたので、自分たちで選べるのがすごく楽しい。一生残る記念だから、慎重に選ばないと…。迷います。でも、入れ替えが簡単だから、何回でもやり直せる！」

■ 「子ども主体の卒アル」 広げたい

システムを提供するIT企業「エグゼック」（東京）取締役の山中淑史さん（50）に、開発の経緯や活用事例を聞いた。



西条市神拝小学校の授業で、写真の選び方を説明するエグゼック取締役の山中淑史さん

「うちの子の登場回数が少ない」と、卒アルを見た保護者から学校にクレームが入るケースが実際にあります。先生は写真館が作成したレイアウトを見て、児童生徒の名簿に「正」の字を書き、登場回数を数えます。写真を入れ替える度に数え直し、膨大な時間と労力がかかります。

先生や写真館の負担を減らせたらと2020年、「アルバムスクラム」のサービス提供を始めました。現在は全国約3900校、愛媛県では15校で導入されています。AIで卒アルにお薦めのシーンを自動で選び出すこともできます。顔認識の精度は高く、マスクをしていても、低学年の頃の顔でも判別できます。「一卵性双生児も見分けた」という声もありました。「15時間くらいかかっていた写真選定を5時間に短縮できた」（中学校教員）など、効率化の手応えを感じています。

一方、子どもたち自らが「アルバムスクラム」を活用するケースは全国で10校ほどで、先駆的です。西条市神拝小学校を見学し、友達と思い出を振り返りながら写真を選ぶ時間が卒アルの価値を高めると確信しました。「子ども主体の卒アル」を全国に広げたいです。

■ 「あの日あの時がぐっとよみがえる」

神拝小学校の6年生は4学級約180人。学級ごとに先生が撮りためた写真は200～300枚に上る。運動会や修学旅行といった行事に限らず、毎日の授業や教室での様子が細やかに記録されていた。

タブレット端末で写真を見ながら、児童たちは「こんなにたくさん先生が写真を撮ってくれていたって、知らなかった」とうれしそうだ。卒アル作りを通じ、先生を交えて思い出話に花を咲かせていた。



写真を選ぶ児童を見守る山下楓馬先生（右）

授業の最後に、班ごとに選んだ写真と思い出のエピソードを発表した。「1年生を迎える会のゲームを盛り上げました。笑顔がいいなと思いました」「調理実習でベーコンの切り方を失敗したけれど、味は最高でした」「算数の授業で一生懸命考えていた場面です」



選んだ写真にまつわる思い出を発表する児童たち

マスクで顔が隠れていたり、横顔しか写っていなかったりしても、かけがえのない思い出が詰まった一瞬一瞬。その判断はA Iにはできなかったかもしれない。

「先生なら選んでいなかった写真もあって、みんなに決めてもらって本当によかった」と担任の山下楓馬先生（32）が語った。「見返すと、あの日あの時がぐっとよみがえるよね。先生たちだけで作る卒業アルバムより百倍、いや千倍いいものになると思います！」



「卒業アルバムの写真選びをみんなに任せてよかった」と語る山下楓馬先生



「子ども主体の卒アル作り」という試みを始めた、神拝小学校6年部の先生に狙いや手応えを聞いた。

今回の取り組みの中心を担っている山下楓馬先生（32）は、西条市内の別の小学校に勤めていた2023年度に初めて「アルバムスクラム」を使い、教員たちの写真選定作業の効率化を実感したという。神拝小に赴任した24年度も6年生を受け持ち、教員たちで「アルバムスクラム」を利用した。毎年11～12月は写真選定作業の大詰めだが、出勤できない日もクラウド上で作業を進められるので助かったと振り返る。



本年度、子どもたちが制作に携わったのは卒アルの一部分です。運動会や修学旅行、集合写真のページは昨年度と同様に教員が選びました。

子どもたちに委ねた各学級のページは、昨年度の4学級で見開き1ページから本年度は各学級1ページに増やしました。子どもたち自身が「載せたい」写真は、必ずしも教員や写真館の意見とは一致しません。

掲載回数はA I がカウントしてくれるし、操作は簡単なので、安心して子どもたちの意見を尊重することができました。楽しそうに思い出を語り合う様子を見て、よい試みだったと確信しています。

神拝小6年学年主任の近藤美鈴先生（55）は「A I の活用で生まれた余裕を子どもたちのために使いたい」と話す。



6年生の担任を何度も経験しましたが、卒アルの写真選びでは、誰が何回写っているのかを手作業で数えるのが当たり前で、残業をしていました。A I の活用で業務の効率化と負担軽減につながりました。

卒業を控えた子どもたちのために、思い出の動画や冊子づくりなど、やってあげたいことが卒アルの他にもたくさんあります。それらに時間を回せるのがうれしいです。

今回、子どもたちが話し合って写真を選んだ卒アルは、一層思いのこもった記念品になり、長く大切にもらえると思います。



将来、卒業アルバムを開きたくなるのはどんな時だろう。ページをめくれば、友達や恩師の笑顔が励ましてくれるにちがいない。そして、みんなで写真を選んだことも「思い出の1ページ」に加わっているはずだ。

Special E 記事一覧はこちら

